

あした 未来へつなぐ

【安全・安定輸送への取り組み】

ひとりでも多くの人の役に立つために、
この北海道で地域と人のために私たちができること。
JR北海道グループは、いま真摯に向き合います。
「未来(あした)へつなぐ」ために。

文＝本間 吾里砂

安全・安定輸送の確保に向け、 万全の冬期対策を目指すJR北海道

昨

シーズン、北海道は異常なまでの大雪に見舞われました。ここ数年は、積雪の記録も毎年のように更新されており、気象庁ではこの冬も寒冬で日本海側の多雪傾向が続く可能性があるとしています。公共交通機関としての役割を担うJR北海道にとって、冬

期の安全・安定輸送の確保は最重要課題。今シーズンも大雪や吹雪などへの対応を見据え、さまざまな取り組みを展開しています。

その一つが、「新型除雪機械への取替による除雪体制の強化」です。今年度は六台を新しいものに取り替え、さらに二台を増備し、計百二十七台を確保。

ラッセルモーターカー、排雪モーターカー、排雪モーターロータリーを全道に配備し、除雪体制を強化しています。

続いて二つ目は、「ポイント不転換防止対策」として、ポイント融雪ピット式を岩見沢駅に新たに三カ所設置。旭川駅、手稲駅、札幌運転所とあわせ、設置箇所は計六十二カ所となり



取替3台、増備2台、計62台を確保した「排雪モーターロータリー」。

ました。また、ポイントマトヒーター、圧縮空気式ポイント除雪装置を有効活用して、水塊や雪を熱や空気で取り除き、ポイントの正常な動作をサポートします。

そして、三つ目の「駅間等における吹き溜まり対策」では、函館線、札沼線、宗谷線、根室線の一部の駅間にそれぞれ防雪柵を新設。これにより、防雪柵は八百六十七カ所、総延長七十八・七キロメートルとなりました。また、降雪状況の情報収集が難しい場所や、札幌圏の重要箇所には降雪モニターカメラを新設。防雪柵は地吹雪などから線路を守り、降雪モニターカメラは大雪や天候の急変を確認することがで

きるツールとして、ともに輸送障害防止に役立っています。

そのほか、線路に敷いたバラスト飛散防止対策、車両の新製導入による予備車の確保、徹底した車両管理、路線状況に応じた運行計画の変更など、ハード、ソフトの両面から対策を講じ、冬期の安全・安定輸送の確保に努めています。

ただ、いくら万全の体制を整えても、自然現象が相手だけに予測不能な事態に遭遇することもあるかもしれません。それでも、JR北海道は、お客さまの安全を最優先に考え、手ごわい雪と氷に全社一丸となつて挑んでいきます。



平成25年1月、線路を覆い尽くすほどの大雪に見舞われた苗穂駅。今シーズンも、できる限りの対策を講じ、安全・安定輸送の確保に尽力!



車輪削正を徹底し、昨シーズンの列車運休の原因になった車輪表面の剥離に対応。

①